

現代の日本における子どもの貧困の研究について

前田 美和子*

(2018年1月15日 受理)

A Study into Child Poverty in Modern Japan

Miwako MAEDA*

Key words: Child Poverty 子どもの貧困, Mental Poverty 精神的貧困, Basic investigation 基礎検討

1. はじめに

2009年10月、厚生労働省は日本の子どもの相対的貧困率が14.2%、すなわち18歳未満の子ども6人に1人の子どもが貧困であることを公表した。このことはマスメディアを通しても報じられ、人々に大きな衝撃を与えた。人々の間に日本は戦後の復興を遂げ、世界の中でも経済大国となった。それゆえ、日本社会において貧困はなくなったという意識が人々の中にあっただからである。

子どもの貧困問題は徐々に知られるようになり、この公表から10年近く経った今、さまざまな調査、研究、議論、対策などが進められている。

例えば、2015年には日本財団・三菱UFJリサーチ&コンサルティングは子どもの貧困を放置した場合の経済的影響の推計を行った。その結果、現在15歳の子ども1学年だけでも、社会が被る経済的損失は約2.9兆円に達し、政府の財政負担は1.1兆円増加、子どもの貧困問題が社会問題に留まらず、経済へ大きな影響を及ぼす経済問題であることを明らかにした(日本財団・三菱UFJリサーチ, 2013)。

また、政治的には2013年に子どもの貧困対策法が制定され、翌2014年には子どもの貧困対策大綱の策定が行われるなど、子どもの貧困に対する政策が次々と進められている。

さらに研究の分野でも教育学、臨床心理学、福祉学、法学、社会学、経済学、医歯学、栄養学、保育学等、多方面から子どもの貧困についての研究が進められている。その他、実践面においても、子ども食堂や子どもシェルター、放課後の居場所作りなどの取り組みが全国的に見られるようになってきている。

このように多方面から子どもたちの生活や成長をより良いものにしようとする取り組みや研究がみられる一方で、虐待や不登校、引きこもりなど子どもたちの健やかな育ちと相反する報道は後を絶たない。

児童精神科医・臨床心理学者の滝川一廣は貧困の子どもたちは「孤立感や閉塞感が強い」ゆえに「社会全体が貧しく、まわりも多かれ少なかれ貧しさを共有していた時には、その貧しさを『バネ』

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

にその克服をめざして学業に励む（苦学する）というあり方が一つの定型となったのに対して、まわりの豊かさからこぼれるように貧困化している場合は、その貧しさはバネとしてはきかず、むしろ士気喪失をもたらす」（滝川，2011）ことを指摘しているが、子どもたちの孤立感や閉塞感など、子どもたちの精神的な貧困を重点的に扱った研究や対策は、経済や社会的な改善を目指した研究や取り組みに比べ、まだまだ少ないように思われる。

そこで本論文では、子どもたちの精神的な貧困についての研究や対策がどの程度取り組まれているのか明らかにしたい。

2. 日本における「貧困」の問題点と「貧困対策」の問題点

2009年に子どもの相対的貧困率が14.2%であることが公表された際、人々に大きな衝撃を与えたことを先に記したが、これは日本人の中にある貧困のイメージが、相対的貧困ではなく絶対的貧困をイメージしていたからである。つまり人々は、高度経済成長を経て、国民のほとんどは自らを中流階級であるという意識を持つようになり、貧困で寝食に困っているのはホームレスの人々など一部の限られた人たちだけだと考えるようになっていたからである。

2009年の発表以降、相対的貧困について説明される機会も増えてきたが、ここで今一度確認しておきたい。

絶対的貧困とは、貧困ゆえに十分な食事をとることができないなど、人間として最低限の生活を営むことが困難な状況である。例えば「戦時中は貧しくて食べる物もなかった」といった場合の貧困は絶対的貧困を表している。

一方、相対的貧困とは、人間が社会の中で生活する際、その社会の殆どの人が享受している普通の生活や行為を行うことができないことである。たとえば貧困ゆえに修学旅行に行けない、あるいはクラブ活動に参加できない、塾に行けないといった子どもや、休日に友だちとカラオケに行けない、診察や検診などで病院に行くこともできないといった状況は相対的貧困とすることができる（阿部，2012）。

このように、「貧困」と言えばこの絶対的貧困と相対的貧困の二つの表現がある。

しかし経済政策学者で社会学者の阿部（2012）によると、子どもの貧困が6人に1人という数値は目新しい印象を受けるが、実はそうではなく、バブル経済に突入する1985年の段階で日本の子どもの貧困率はすでに10.9%、すなわち10人に1人の子どもが貧困状態であった。つまり、子どもの貧困はリーマン・ショック以降に起こった新しい社会問題というわけではないのである。ところが、2009年の厚生労働省の発表まで子どもの貧困問題は一部の研究者を除いて知られておらず、一般的には、あたかも近年の日本には存在しなかった子どもの貧困が、不景気の煽りを受けて生じた問題であるかのように受け取られがちで、それゆえ、その対策も景気対策や経済的な対策について講じられることが多かった。

さらに、この子どもの貧困率の数字は1985年から2009年にかけて多少の増減はあるものの右肩上がりに上昇していることを指摘し、貧困問題が単なる景気動向に影響されているものではなく、むしろより構造的な社会問題が、貧困問題と関係しているものであり、貧困率を下げるためには景気対策のみでは有効でないという（阿部，2012）。

また、相対的貧困の子どもたちは自分の価値を見失い絶望的な気分におちいり（村田，2011）、自

尊心や仲間を作る機会を奪われ（山田，2017），希望や意欲を喪失し，人生そのもののあきらめへとつながっており，人生の早い時期からドロップアウトしていく可能性を高めている（浅井，2011），といった傾向がみられ，経済的貧困が精神的な貧困と関わりがあると指摘することができる。

かつては三世帯が一緒に暮らしていたり，近所付き合いも見られ，互助的な支えあいが社会の中にあった。そしてそれは子どもを育てることにしても同様で，地域で子どもを育てるという意識が社会の中にあった。しかし，現代社会においては核家族化が進み，近所づきあいや地域での互助的な支えあいも見られなくなった。このことに加え，ただでさえ経済的困窮は同時に社会的な孤立を招き，育児の困窮を一層助長し，問題をエスカレートさせやすくなっている（滝川，2011）のにもかかわらず，貧困家庭に対してはさらに「親が責任を果たしていない」「子どもは親を選べない」などといった保護者や貧困家族に対して，自己責任論に基づく厳しいまなざしが注がれ（郭，2016）ており，貧困家庭の抱える孤立感や閉塞感是非常に大きなものであると考えられる。地域社会や自分の所属集団から排除されたり差別視されたりする経験は，子どもたちの心に深い傷をつくり，無気力状態に追い込んでしまう（藤川，2011）。

しかし，社会福祉学者であり，教育心理学者，臨床心理学者，教育学者の武田信子は，自身の臨床心理士としての経験から，裕福な家庭の子どもたちが必ずしも幸せでないことを実感したり，その反面，貧困家庭でも懸命に働く親とともに家を支え，強く豊かな心をもった子どもに出会ったことから，経済的豊かさはどこまで人にとって必要な豊かさであるのか，貧困によって何が子どもを傷つけ，何が子どもを育てるのか慎重に検討する必要があるという（武田，2015）。

つまり，阿部も武田も，子どもの貧困問題の解決を目指すのであれば，経済や政策上の問題だけを改善するのではなく，社会の構造や子どもをとりまく環境にも目を向け，検討されるべきだというのである。

一方，評論家で翻訳家の清水眞砂子は少し異なった視点を投げかけている。清水は（2011）児童文学を通して貧困を考えている。たとえば『ハイジ』やハイジや宮沢賢治の『狼森と兎森，盗森』の子どもたちは絶対的貧困ではあったものの，物語を通して彼ら，彼女らから貧しさを感じることはないという。しかし『あのころはフリードリヒがいた』のフリードリヒには，物語の終盤で貧しさを感じるという。特に母も父もすみかも奪われ，追いつめられていくユダヤ人の少年フリードリヒが，最後に「ぼく」たちの前に現れたとき，十三歳の誕生日にひとりの先生から贈られた万年筆のキャップしか持っておらず，さらに「飢えと恐怖の中，ほとんどすべての人々との関係を絶たれ，やがて防空壕に入ることも拒否されて，壕の入り口で爆撃を受け，死んでいった」様子は「世界のありとあらゆる貧しさが凝縮して描かれている」。この場面に描かれている最大の貧しさとは「絶望という名の貧しさ」であるという。つまり，換言すると貧困とは，人間が社会のあらゆる関係を切り離されることだと定義することができる。これは，絶対的貧困とも相対的貧困とも異なる視点である。

人間が社会的な生物であることを考えると，このことは非常に重要な視点である。

この点については，マザー・テレサの考え方と近いものである。1982年にマザー・テレサは来日した際，いくつかの講演をしているが，その中で日本社会にある貧困について，次のように語っている。

あなた方もわたしも、日本は裕福な国だと思っています。たしかにそうです。日本は富める国です。しかし、あなた方がご存じないことがあるはずで、親戚の方のなかにも、とてもこまっていたらっしゃる方がいるのを、ご存じないだけかもしれません。一人きりで寂しい思いのお年を召したお母さん、身体に障害のあるお子さんなど……みんな、とても寂しいのです。それが貧しいということなのです。それなのに、もしかしたら、あなた方はちょっとほほえんであげる暇もないほどのありさまかもしれません。五分でもいいから、ちょっと座って……それも、忙しくてだめなのではないでしょうか。(女子パウロ会編, 2003)

マザー・テレサはまた、同日、貧しさについて場所を変えて次のように発言している。

貧乏という言葉は、あまり聞こえがよくないということですが……それでも、貧乏、貧しいということは物質的なことだけではなく、精神的、霊的な意味も持っていると思います。パンに飢えているだけではなく、神を求めている、神様の言葉を待っている、愛に飢えているなど。

裸だということは単に身にまとうものがないというだけではなく、人間の尊厳を失ってしまうことでもあるのです。ホームレスとは住む家がないというだけではなく、見捨てられ、望まれず、愛されないということでもあるのです。(女子パウロ会編, 2003)

1982年と言えば高度経済成長期が終わり、社会が豊かになり、またバブル以前で、人々の中に中流階級意識が生じ、社会から一見貧しさ(絶対的貧困)がなくなったかのように思われていた時代である。マザー・テレサ自身「日本は裕福な国だと思ってい」と述べていることから、この時マザー・テレサが語った「貧し」さは、当然絶対的貧困ではない。

マザー・テレサは、一見、経済的にも物質的にも豊かに見える日本社会の中で、「一人きりで寂しい思いのお年を召したお母さん」「身体に障害のあるお子さんなど」に対して、五分の時間も割くことをしない社会のあり様を見た。これらは社会から切り離された状態であり、その様子こそ日本社会の抱える貧しさだと指摘しているのである。

これは清水の言う貧困と同質の貧困と言え、絶対的貧困の物質の有無、相対的貧困の社会的な問題とは異なった精神的な貧困があるように思える。この視点は現代の日本における子どもの貧困問題を読み解く上で重要なものだと考えられる。よってこの貧困を「精神的貧困」と本研究では名付きたい。

3. 分析

近年、我が国において子どもの貧困について社会的に認識がされるようになり、研究や対策が進められてきたことはすでに述べたとおりである。しかし、上記の視点を踏まえた時、それらの論文は膨大な数があるにもかかわらず、貧困に対する視点がさまざまであるために、「子どもの貧困」とは何かという統括的な研究はなされていないと考えられる。そこで、本研究では近年わが国で行われてきた「子どもの貧困」について述べられた論文を、実験的に物質の有無に主眼を置いて論じられているもの(「物質的」)、社会的な問題に主眼を置いて論じられているもの(「社会的」)、精神的な貧困に主眼を置いて論じられているもの(「精神的」)の3つに分類を行いたい。

表1 国立国会図書館

年	論文名	物質的	社会的	精神的
2016	子どもの貧困とひとり親家庭の自立支援—児童扶養手当法の一部を改正する法律案—		○	
2013	外国人の子どもに見る三重の剥奪状態		○	
2013	虐待事例に表われる障害と貧困—家族の脆弱性という視点から		○	
2012	福祉国家の変容と子どもの貧困—労働のフレキシビリティとケア		○	
2012	イギリスにおける養育費政策の変容—子どもの貧困対策との関連から		○	
2012	ドイツにおける子どもの貧困		○	
2009	子どもの貧困と就学援助制度～国庫補助制度廃止で顕在化した自治体間格差～		○	
2007	子どもの貧困の動向とその帰結		○	
2006	経済先進国における子どもの貧困について—ユニセフ・イノセンテ・リサーチセンター・第6報告書に基づいて		○	
2003	先進工業国における子どもの貧困		○	

表2 CiNii

年	論文名	物質的	社会的	精神的
2017	子どもの貧困の経験という視点			○
2017	チーム学校に向けた現代的課題（2）—生徒指導的観点から—		○	○
2017	人権教育の継承と「子どもの貧困」—小・中学校教員調査を通じて—		○	
2017	教師の労働環境と子どもの貧困認識—退職・現職教師の世代的対照性を沖縄における10件のインタビュー調査から探る—	○		
2017	子どもの貧困対策と子育て運動の拡張—稚内市の地区別「子ども支援ネットワーク」に注目して—		○	
2017	「子どもの貧困」をとらえなおす—スクールソーシャルワーカーによる『金銭基礎教育プログラム』の実践—			○
2017	北海道稚内市における教育課題への地域的対応—稚内市貧困問題プロジェクト及び稚内市学力向上プロジェクトと子育て運動の関連を中心に—		○	
2017	子どもの貧困		○	○
2017	日台の社会構造、家族構造の変動とひとり親世帯の支援施策に関する比較研究		○	
2017	子どもの貧困に関する—考察—就学援助事業の位置づけなど—		○	

なお、今回は国立国会図書館に所蔵されている文献のうち、タイトルに「子どもの貧困」と付けられているインターネット公開されている論文上位10本と、同じくタイトルに「子どもの貧困」と付けられている CiNii に掲載されている上位10本で分類を行うこととする。

4. 考察

今回、実験的に国立国会図書館と CiNii から「子どもの貧困」に関する論文を抽出し、双方でどのような貧困について述べているかを整理した。まず国立国会図書館から抽出した論文には2003年から2016年に発刊されたものが挙げられ、子どもの社会的貧困について述べたものがほとんどであった。つまり、物質的および精神的なものに主眼をおいて論じられている研究は見当たらなかった。このことから、子どもの貧困に関わる論文は社会的な貧困について集中しており、また海外の子どもの貧困などを取り上げているものが見受けられることから、国家的な対策が必要な、大掛かりな視点で論じてある論文が多いと考えられる。一方で CiNii では、物質的なものに主眼を置いて論じられているものが1本、社会的なものに主眼を置いて論じられているものが7本、精神的なものに主眼を置いて論じられているものが4本であった。上位10本はいずれも2017年に発刊された新しい研究であり、より広い視点から子どもの貧困問題について考察がされはじめているといえよう。また同時に、教育分野からの研究が目立ったことに加え、それらの中には精神的な貧困に言及しているものも見られ、一時的あるいは特別な社会福祉的な対策だけでなく、教育機関などにおける日常の支援が必要であるという傾向を伺うことができる。ただし、これらの論文に見られる対策案は十分に言及されているとは言えない。よって、今後の研究課題として、精神的な貧困に注目し、対策案を講じていきたい。なお、今回の論文抽出は20件という限られたものだったため、さらに詳細な論文の主題の分類も行っていきたい。

引用・参考文献

- 1) 日本財団・三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング：子どもの貧困の社会的損失推計レポート <https://www.nippon-foundation.or.jp/news/articles/2015/img/71/1.pdf> (2018年1月3日閲覧)
- 2) 滝川一廣：貧しさと子どものそだち、そだちの科学 16, pp 2-7, 2011
- 3) 阿部彩：「豊かさ」と「貧しさ」—相対的貧困と子ども、発達心理学研究 23 (4), pp 362-374, 2012
- 4) 村田豊久：貧困がこどもの精神生活にどういった影響をもたらすかについて考えたこと、そだちの科学 16, pp 77-79, 2011
- 5) 山田昌弘：子どもの貧困問題を考える—子どもの貧困の何が問題か？、弘道 125 (1108), pp 13-18, 2017
- 6) 浅井春夫：子どもの貧困—日本の子どもは幸せか、民医連療 465, pp 6-13, 2011
- 7) 郭芳：日本における子どもの貧困—2008年以降の文献検討を中心に、国際経済労働研究 71 (3), pp 25-33, 2016
- 8) 藤川洋子：非行と子どもの貧困、そだちの科学 16, pp 15-20, 2011
- 9) 武田信子：貧困と幸せを考える、世界の児童と母性 79, pp 11-18, 2015
- 10) 清水真砂子：貧しさを生きる子どもたち—児童文学に見る貧困、そだちの科学 16, pp 80-82, 2011
- 11) 女子パウロ会、三保元訳：愛—マザー・テレサ 日本人へのメッセージ, 2003
- 12) 綿村恵：子どもの貧困とひとり親家庭の自立支援—児童扶養手当法の一部を改正する法律案—、立法と調査 375, pp 12-26, 2016
- 13) 宮島喬：外国人の子どもにみる三重剥奪状態、大原社会問題研究所雑誌 657, pp 3-18, 2013
- 14) 藤原里佐：虐待事例に表れる障害と貧困—家族の脆弱性という視点から、大原社会問題研究所雑誌 657, pp 32-43, 2013
- 15) 原伸子：福祉国家の変容と子どもの貧困—労働のフレキシビリティとケア、大原社会問題研究所雑誌 649, pp 30-46, 2012
- 16) 下夷美幸：イギリスにおける養育費政策の変容—子どもの貧困対策との関連から、大原社会問題研究所雑誌 649, pp 1-15, 2012

- 17) 齋藤純子：ドイツにおける子どもの貧困，大原社会問題研究所雑誌 649, pp 16-29, 2012
- 18) 鷹咲子：子どもの貧困と就学援助制度～国庫補助制度廃止で顕在化した自治体間格差～，経済のプリズム 65, pp 28-49, 2009
- 19) 大石亜希子：子どもの貧困の動向とその帰結，季刊・社会保障研究 43 (1), pp 54-64, 2007
- 20) 松平千佳：経済先進国における子どもの貧困について：ユニセフ・イノセンテ・リサーチセンター・第6報告書に基づいて，静岡県立大学短期大学部研究紀要 19-W, pp 1-9, 2005
- 21) ブルース・ブラッドベリー，マークス・ジョンティ：先進工業国における子どもの貧困，季刊社会保障研究 39 (1), pp 4-18, 2003
- 22) 大澤真平：子どもの貧困の経験という視点，教育福祉研究 22, pp 15-27, 2017
- 23) 片山紀子・角田豊・小松貴弘：チーム学校に向けた現代的課題 (2)―生徒指導的観点から―，京都教育大学紀要 131, pp 33-46, 2017
- 24) 伊藤悦子：人権教育の継承と「子どもの貧困」―小・中学校教員調査を通じて―，京都教育大学紀要 131, pp 69-75, 2017
- 25) 仲嶺政光：教師の労働環境と子どもの貧困認識―退職・現職教師の世代的対照性を沖縄における10件のインタビュー調査から探る―，富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報 19, pp 42-60, 2017
- 26) 吉岡亜希子：子どもの貧困対策と子育て運動の拡張―稚内市の地区別「子ども支援ネットワーク」に注目して―，社会教育研究 35, pp 53-64, 2017
- 27) 瀧澤雪子：「子どもの貧困」をとらえなおすスクールソーシャルワーカーによる『金銭基礎教育プログラム』の実践―，明治大学教育界紀要 9, pp 7-15, 2017
- 28) 富樫千紘・御代田桜子・米津直希：北海道稚内市における教育課題への地域的対応―稚内市貧困問題プロジェクト及び稚内市学力向上プロジェクトと子育て運動の関連を中心に―，稚内北星学園大学紀要 17, pp 115-134, 2017
- 29) 武内一：子どもの貧困，佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 5, pp 209-237, 2017
- 30) 大友優子・山西裕美・大友康博：日台の社会構造，家族構造の変動とひとり親世帯の支援施策に関する比較研究，佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 5, pp 239-256, 2017
- 31) 林一夫：子どもの貧困に関する一考察―就学援助事業の位置づけなど―，明星大学教育学部研究紀要 7, pp 103-112, 2017